桟敷山

毎日新聞旅行　　24 日

浅間山と菅平が見渡せる山であるが、残念ながら曇り空であった。この山には 2016 年 7 月にも登っている。ツアーに申し込むときには過去の履歴をチェックするのであるが見落としてしまった。この山が好きだから 2 度目も来たわけではない。登っているうちになんか来たことあるなあと思いだした。頂上に立って絶対来たことあると確信を持った。それもそれほど昔ではない。帰ってから山旅記を見直したらやっぱりであった。前回と同じような日にちであったが、あの時は頂上付近にヤナギランがいっぱい咲いていた。今回は自動車道路脇に 1 輪のみであった。梅雨明けが遅いので花も遅れているようだ。私の好きなミヤマオダマキも沢山咲いていたが、ここのはすべて白い花で感激がない。ミヤマキオダマキというらしい。やはり花びらが青で中心の筒状の部分が白であれば申し分ないのだが。ヒオウギアヤメがケッコウ咲いていたのが救いか。“この花は何アヤメだろう”と言ったら、あるおばちゃんがスマホを取り出してバシッと撮ってアプリで検証したら、ヒオウギアヤメと出た。リスペクト！

ツアーリーダーは小林さんと新津さん。メンバーはジジイが 5 名でババアが 14 名、大体いつものパターンだ。ジジイが一人、“前にも会いましたねエ”と声をかけてきた。いつもの通りこっちは覚えていない。

東京電機大学ワンダーフォーゲル(WV)部山小屋のこと

20 日(土)に我が母校東京電機大学(WV)部の OB 会があった。60 年台卒は、鈴木さん・本庄さん・山田君と私。70 年台卒は会長の千野君・副会長の牧島君・中村君・茂呂君・北村君・北出君。多分それ以降と思えるが川上君・中野君・一兜君などが参加した。総勢は 15 人くらいいたと思う。

数年先には創部 60 年になるという。鈴木さんや本庄さんが学生時代に同好会から部に昇格したらしい。私が 1 年の時に本庄さんは 4 年生であったが、私は部になってからのことしか知らない。当時は大変な登山ブームの最中であった。戦後も少し落ち着いてきて何か運動をしたいが、野球場やサッカー場のような設備はないし、スポーツジムもない。山登りであれば施設が無くてもなんとかなる。人数の多い少ないも関係ない。それに日本人がヒマラヤのマナスルに登るなどして、山人気は一気に高まった。新聞やラジオのマスコミもこれらを大きく取り上げた。大学山岳部などがヒマラヤ遠征を行うと新聞社が後援をすることが一般化していたといっても言い過ぎではなかった。土曜日の夜の新宿駅や上野駅には夜行電車で登山に行く人であふれかえった。1965 年の 5 月連休の時にはいわゆる台湾ボウズ（太平洋沿岸の寒冷前線上を台風が移動すること）というやつに見舞われて、天気が大荒れに荒れた。日本全国の山で 62 人もの死者が出た。それでも山人気が衰えることはなかった。山岳部は死ぬからやだけど、WV ならば死ぬことはないだろうということで、この時代は人気絶頂であった。こんな山人気時代に東京電機大学 WV 部が誕生したわけである。本庄さんによるこの日の話では部になってホッとしたところで、“活動が緩んでしまうのではないかということが心配されたので、浮かんできたのが山小屋建設であった。”ということである。私が 4 年生になっていた時のクラブ総会で、OB から山小屋建設の話が提案された。私は反対の急先鋒に立った。“WV というものは自然の山野を自由気ままに歩くのが本来の姿である。拠点を設けるのはその考え方と相反するのではないか。”という論拠である。総会でそんな内容の熱弁をふるったので、私の意見に賛同する学生が多く、山小屋建設案は一旦否決されてしまった。この時 OB 会長であった森井さんのイカリはものすごく、“お前のようなやつは社会に出てから偉くなれないぞ”とどやされた。その後の私の社会人生活を振り返ると、まあこの見方は当たっていたが。山小屋建設案は、

OB・現役合同総会とか名前を変えた会で承認されて、結局山小屋は建設された。反対した私も出来てからは結構使った。安達太良山の山麓という場所も適切であった。雪山も楽しめるし、スキーも楽しめる。もちろん夏山もいろいろなコースから登った。特に 1972 年から 79 年までは、私を最年長とする各学年一人ずつの 6・7 人くらいのメンバーが集まって毎年正月を山頂にテントを張って過ごし、塩沢温泉にある山小屋に降った。卒業後に 5 年くらい務めた会社を転職したが、その時浮いた時間を利用して冬の安達太良山に一人こもって、山頂へ登った時にホワイトアウトに遭って危うく死にそうな目にも遇った。安達太良山には合計 8 回登ったが、小屋だけに行って登らなかったということは無い。

今回集まった OB の中には山小屋に対する愛着をひしひしと感じさせる人が多かった。しかし私には山小屋というものに対する愛着はほとんど無い。むしろ日本百名山を全部登ることとか、世界中の面白そうな山を求めてヒマラヤやキリマンジャロへの追及に励んだ。28 か国 40 回近くの海外山行も行った。このように WV を経験させてもらったおかげで、ずいぶんと面白く多くの経験を積ませさせてもらった。

まあ今回集まった OB から見ると今の学生の部活動に対する身の入れ方は信じられないものがあるようだ。この件に関しては私の意見も他の OB と変わらない。今は合宿というものも参加は自由であるという。クラブ員の年間山行日数も 30 日に満たない人がほとんどらしい。今でも 30 日以上は登っている近年の私よりも少ない。私の学生時代には年間 50～80 日は山に行っていた。我々にとって今の学生はこれでクラブ活動が成り立っているのかと思って信じられない。しかし、一つにクラブ活動だけの問題ではなく、人としての生き方そのものが大きく変わってきているのであろう。我々のような世代は高度成長期を支えてきた。その結果バブルもありその崩壊もあった。そのエネルギー源は学業を放りっぱなしてもクラブ活動に熱を上げるような姿勢にあったような気もする。一時は体育会系などというものが社会でもてはやされた時代もあった。しかし今では身の回りを見回わしてみると、私の若いころにはまだ無かったデジカメがブームになったが早くもスマホに取って代わられている。技術系の社員にとって必需品になっていたパソコンもスマホやタブレットにその存在を脅かされている。私のように自作パソコンを組み立てて悦に行っていた人間は、SNS の中で Twitter や LINE やフェイスブックなどというものに抵抗を示している。どいつもこいつも胡散臭い。電子マネーなんて誰が使ってやるか。どうやら私は好んで過去の人への家の入り口ドア―を開けに行っているみたいだ。私の居住するマンションでは、10 年位前には毎月の古紙回収日には玄関が排紙で一杯になっていた。今ではその量は 1／5 にもならない。テレビでさえ今の世代の人は、一時代前の人とは見方が違う。40 年前の大みそかの紅白歌合戦は視聴率 80%を超えていたのに、今では視聴率 10%を超える番組はまずまずの評価を得られる。力道山のプロレスをテレビで見て興奮して死んだ人がいたと新聞記事に出ていたことがあった。今だったら“心筋梗塞でした”で済まされてしまうであろう。巨人戦が日テレの夜のテレビ番組にないなんて、ここは日本ではないのかと思ってしまう。

この OB 会議の終幕には、山小屋撤去の場合のことがテーマになった。今の学生からすれば、なんで自分たちが山小屋の面倒を見なければいけないのかと思っていることであろうから、山小屋はその役割を終えたと思ってもいいであろうと思う。ついでに言うならば、OB 会というものも 10 年単位くらいで分割したらどうであろうか。古い人は来やすいが新しい人の数があまりにも少ない。年寄りが幅を利かせやすいということは避けられないのではないか。最もそんなことは上から決めることではなく、その当事者が自主的に決めればいいことだろうとも思うが。もしかしたら“そんなこと、とっくにやっていますよ”と言われるのが一番いい。